

薬師寺東塔檨銘と大友皇子執政論

—付、関西大学博物館所蔵金石文拓本調査目録抄

西 本 昌 弘

Does the inscription of the Yakushiji Temple east pagoda prove
that Prince Otomo succeeded to the throne?

NISHIMOTO Masahiro

The inscription on the east pagoda of Yakushiji Temple says that this temple was built eight years after the throne of Emperor Tenmu, which states that “Nihon Shoki” built Yakushiji nine years after the throne of Emperor Tenmu. There is a one-year gap between what you are doing. Why are these errors occurring? Emperor Tenmu took the throne in 673 and was the reign of Prince Otomo in 672, but “Nihon Shoki” erased the reign of Prince Otomo and rewrote the reign of Emperor Tenmu that year. It’s possible. I would like to discuss such a hypothesis with reference to the opinions of researchers so far.

キーワード：薬師寺東塔檨銘、大友皇子、即位、称制、日本書紀、金石文拓本

はじめに

ユニット3「古都・史跡の時空間」では、飛鳥・難波・奈良・京都など日本の古都を形づくってきた地域の歴史を掘り起こし、この地域の史跡や文化遺産に関わるデータベースを作成することを目指した。具体的には、関西大学図書館・博物館が所蔵する金石文拓本資料、絵図資料、古典籍資料などに関する調査・研究を進め、古典籍資料のいくつかについてはデジタルアーカイブに組み入れることができた。

ここでは、関西大学博物館所蔵の金石文拓本資料のなかから薬師寺東塔檨銘を取り上げ、この檨銘の内容が投げかける歴史上の問題について論述してみたい。また、末尾に金石文拓本資料の調査によって得られたデータを摘記した「金石文拓本調査目録抄」を付載する。

1. 薬師寺東塔檼銘について

薬師寺東塔檼銘は奈良市西ノ京町に所在する薬師寺東塔の銅製檼管に刻まれた銘文である。関西大学博物館の本山コレクションには木崎愛吉（好尚）旧蔵の金石文拓本資料が含まれているが、そのなかに「薬師寺東塔檼」（A6-60）と題して、この檼銘の拓本が収められている。すでに紹介したように、この拓本は大正2年（1913）8月17日に木崎愛吉が織田完之（鷹洲）・武岡豊太（楽山）および武岡の2子（博三・四郎）とその学友竹林嘉一郎を伴い、総勢6名で薬師寺を訪れた際に入手したもので、実際に東塔に登って檼銘を採拓したのは武岡の2子と竹林であった。¹⁾

この薬師寺東塔檼銘は本薬師寺の移建・非移建論をめぐる論争に利用されたほか、大友皇子の即位を裏付ける資料としても注目されており、江戸時代以来、さまざまな議論が闘わされてきた。木崎拓本によってその全文を示すと、以下のようになる（句読点は西本が加えた）。

維清原宮馭宇

天皇即位八年、庚辰之歳、建子之月。以

中宮不念、創此伽藍。而鋪金未遂、龍駕

騰仙。大上天皇、奉遵前緒、遂成斯業。

照先皇之弘誓、光後帝之玄功。道濟郡

生、業傳曠劫。^(旃)式於高躅、敢勒貞金。

其銘曰、

巍巍蕩蕩、藥師如来、大發請願、廣

運慈哀。猗猗聖王、仰延冥助、爰

飭靈宇、莊嚴調御。亭亭寶刹、

寂寂法城、福崇億劫、慶溢萬

齡。

清原宮馭宇天皇（天武天皇）の即位八年、庚辰の歳（西暦680年）、建子の月（11月）、中宮（皇后）の不予のため、この伽藍を創建した。ところが「鋪金未遂」の間に天皇が崩じたため、「大上天皇」が前緒に遵い、造営を成し遂げた結果、「先皇」の弘誓を照らし、「後帝」の玄功（隠れた功績）を輝かせた、というのである。「鋪金いまだ遂げず」とは、インドの須達長者が釈尊のために祇園精舎を建設・寄進する際に、地面に金を敷きつめて園地を買取ったという故事に由来するもので、薬師寺の用地が決まる前にと解釈する説²⁾と、薬師寺の造営が

1) 西本昌弘「木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檼」拓本と命がけの手拓作業」『阡陵』82、2021年。

2) 会津八一「薬師寺東塔の銘文を読む」『会津八一全集』1、中央公論社、1982年、537-538頁、福山敏男「薬師寺の歴史」福山敏男・久野健『薬師寺』東京大学出版会、1958年、7-11頁。

完了する前にと解釈する説³⁾の2つがある。

『日本書紀』天武9年（680）11月癸未（12日）条には、

皇后体不予、則為皇后請願之、初興薬師寺。仍度一百僧、由是得安平。是日、赦罪。

とあり、皇后（鸕野皇女）の不予に際して、天武天皇が発願して薬師寺を創建し、僧100人を得度させたため、皇后は平安を取り戻したという。『日本書紀』によると、天武崩後の朱鳥元年（686）12月、天武のため無遮大会を大官大寺・飛鳥寺・川原寺などに設けたが、ここには薬師寺の名がみえない。その後、持統2年（688）正月に薬師寺で無遮大会を設け、同11年7月に公卿百寮が薬師寺で仏開眼会を設けた。また『続日本紀』には、文武2年（698）10月に薬師寺の構作がほぼ終わったので、詔して衆僧を寺に住ませたとある。

東塔檨銘の文意をめぐっては、本薬師寺の平城京への移建・非移建問題と関わって明治以来さまざまな議論があり、檨銘の「大上天皇」は元正天皇あるいは元明天皇をさすともて、本薬師寺の平城京への移建までを述べたものとみる説⁴⁾が唱えられたこともあった。しかし、東塔檨銘は本薬師寺の創建事情のみを記したものとみるのが妥当であろう。

醍醐寺本『諸寺縁起集』所収の「薬師寺縁起」は平城遷都以前の薬師寺造営について、

右寺者、天武天皇即位八年^庚十一月、皇后病不愈、巫医少驗。因之、為除病延命、発奉造丈六薬師仏像之願、爰靈驗有感、皇后病癒。天皇大感。已企金銅之像、^{〔補〕}補金未畢、以十四年^{丙戌}秋九月九日、天皇崩於明香清御原宮、以戊子年十一月、葬於高市大内山陵。皇后即帝位、是持統天皇也。天皇為太上天皇前緒、高市郡建寺、本薬師寺是也。即塔路銘文云、（下略）

と記し、このあとに東塔檨銘を引用している。こうした書き方からみて、東塔檨銘は飛鳥・藤原地域にあった薬師寺の創建事情を述べたもので、平城京に造営された薬師寺とは無関係であることがわかる。⁵⁾ そうなると、前緒に遵って薬師寺の造営を進めた「大上天皇」とは持統天皇を意味することになろう。「先皇」（天武天皇）と対句になっている「後帝」は持統をさすとも文武をさすとも両様に考えうるが、文武説の方に共感を覚える。薬師寺東塔檨銘は平城遷都以前における薬師寺の造営過程を述べたもので、飛鳥・藤原地域にあった薬師寺のために文武朝初年頃に作成され、持統太上天皇が即位直後の文武天皇の功績を儀礼的に示すために、銘文

3) 町田甲一『薬師寺』グラフ社、1984年、78-80頁。

4) 喜田貞吉「足立康君の薬師寺に関する新研究を読む」『考古学雑誌』21-2、1931年、藪田嘉一郎『日本上代金石叢考』河原書店、1949年、町田甲一「薬師寺の歴史と彫刻」『薬師寺』実業の日本社、1960年。

5) 足立康「薬師寺東塔檨銘の一解釈」『古代建築の研究』上、中央公論美術出版、1986年、97-98頁。

中に「後帝」として文武の名を加えたものと考えられる。⁶⁾

東塔檨銘の序の末句と銘の末句は唐長安の西明寺鐘銘のそれらと一致もしくは類似するので、平子鐸嶺が指摘するように、前者は後者を下書きにして作られた可能性が高い。⁷⁾ところが、西明寺鐘銘の「式旌高躅」を東塔檨銘は「式於高躅」と誤っている。⁸⁾また、東塔檨銘の字配りや行の並びは乱雑で、きわめて拙劣な印象を与える。こうしたことから、東塔檨銘は本薬師寺にあった塔銘を転写したものと考えるのが一般的で。⁹⁾本来の東塔檨銘は1行12字、全12行となるように文字が配されていたと想定されている。¹⁰⁾足立康は平城薬師寺東塔の完成後に工人を塔上に登らせて鏤刻させたために、こうした不用意な転写が行われたとしている。¹¹⁾本来の東塔檨銘は飛鳥・藤原地域に建立された本薬師寺のために作られたが、平城京に薬師寺を移転・造営する際に、もとの銘文を写して刻んだものと考えれば、こうした規格の崩れや誤字のあることはよく理解できるのである。¹²⁾

2. 大友皇子の即位論と執政論

この東塔檨銘の冒頭に「維清原宮馭宇天皇即位八年、庚辰之歳、建子之月（11月）」に薬師寺を創建したとあるのは、大友皇子の即位を証する史料として古くから注目されてきた。前述したように、『日本書紀』では天武9年11月条に薬師寺創建のことが記されるので、「即位八年」とする東塔檨銘の記載と1年の誤差があるようにみえるからである。

天智天皇の死後、壬申の乱をへて天武天皇が即位するまでに大友皇子が即位したであろうことは、近世前期的那波活所や松下見林が指摘していたが、水戸藩の『大日本史』が「天皇大友本紀」を立てたことで、一般に広く知られるようになった。¹³⁾その後、伴信友『長柄の山風』（文政年間成立）が大友皇子即位論を本格的に展開した。信友は『大日本史』が提示した『水鏡』『立坊次第』『大鏡』に加えて、『懐風藻』『扶桑略記』『年中行事秘抄』『薬師寺東塔檨銘』『大鏡』裏書所引「西宮記」などを依拠史料に加え、さらに『日本書紀』巻29、天武2年条の末に記された「太歳癸酉」の記載も大友即位論の傍証であると指摘した。信友によって整備された大友皇子即位論は幕末には定説化し、明治3年（1870）には明治政府によって大友に弘文天皇の諡号が追贈された。

6) 足立康注5論文、宮上茂隆「薬師寺東塔檨銘考」『薬師寺伽藍の研究』草思社、2009年。

7) 平子鐸嶺「薬師寺東塔檨銘臆説」『増訂仏教芸術の研究』国書刊行会、1976年。

8) 平子鐸嶺注7論文408-409頁。

9) 足立康「再び薬師寺東塔檨銘檨銘について」『古代建築の研究』上、前掲、会津八一注2論文、町田甲一注3論文。

10) 宮上茂隆注6論文39-40頁。

11) 足立康「薬師寺東塔建立年代考」『古代建築の研究』上、前掲、148頁。

12) 東野治之「文献史料からみた薬師寺」『大和古寺の研究』塙書房、2011年、184頁。

13) 近世から近代にいたる大友皇子即位論の研究史については、星野良作『研究史 壬申の乱』吉川弘文館、1973年に詳しい。

伴信友の主張に対しては、喜田貞吉が厳しい批判を加えているため、¹⁴⁾ 平安時代以降に成立した史料を拠証とするのは困難になった。そこで残るのは奈良時代までに成立した史料にもとづく議論であり、検討の対象となるのは、信友が主張する次の3点である。

① 『懷風藻』は「淡海朝大友皇子」の伝記を載せて、

皇太子者、淡海帝之長子也。……年甫弱冠、拜太政大臣、總百揆以試之。皇子博学多通、有文武材幹。始親万機、群下畏服、莫不肅然。年二十三、立為皇太子。……太子天性明悟、……会壬申年之乱、天命不遂。時年二十五。

と述べ、大友は立太子したが、「壬申年の乱に会して、天命を遂げず」と伝える。『懷風藻』は『日本書紀』撰進の約30年後に記された書なので、確かな証拠とすべきである。大友は天智崩後に踐祚したが、即位の礼を行う前に乱があったため、「天命を遂げず」と記されたのである。

② 薬師寺東塔檨銘に「維清原宮馭宇天皇即位八年、庚辰之歳」に薬師寺を創建したというのは、『日本書紀』が薬師寺創建を天武9年にかけていることと1年の差があるので、薬師寺東塔が建てられた持統朝までは癸酉年を天武の元年とし、壬申年は大友の御世に立てられていたことが明らかである。

③ 『日本書紀』は代々の元年条の末尾に太歳干支を記す例であるが、天武紀のみ二年条に「太歳癸酉」とある。これはこの年が天武元年であったのを、大友紀の元年を除き、天武元年に改刪するとき、太歳干支をそのまま二年条に残したことによる。

①の『懷風藻』によると、大友は「弱冠」で太政大臣となって万機を親裁し、23歳（24歳の誤りか）で皇太子となり、壬申の乱に際会して25歳で没したという。『日本書紀』天智10年（671）正月癸卯（5日）条に、大友皇子を太政大臣、蘇我赤兄を左大臣、中臣金を右大臣に任じる記事があるが、『懷風藻』では太政大臣任命に加えて、皇太子となった記事がみえている。信友がいうように、『日本書紀』と『懷風藻』の成立年代はわずか数十年しかない。『懷風藻』は『日本書紀』に準じる高い史料価値をもつものなので、大友の立太子記事も簡単には否定できないものといえる。

信友の主張のうち、②に対して喜田は以下のような批判を行っている。第一に『日本書紀』は天武が癸酉年（天武2年）に即位したと明記するので、その癸酉年より数えて庚辰年（天武9年）が即位の八年に当たるのは疑いの余地がない。第二に天智は称制6年の後に即位したが、『日本書紀』は称制の初年（斉明崩御の翌年）である壬戌歳をもって天智の元年としている。第三に持統も称制後の庚寅歳（持統4年）に即位するが、『日本書紀』は天武崩御の翌年である丁亥年を持統の元年としている。以上のような『日本書紀』紀年の筆法をみれば、天武の元年を称制初年の壬申年に置くのは何の問題もない。

ついで喜田は信友の③に対して、以下のような反論を行っている。『日本書紀』巻29は天武

14) 喜田貞吉「女帝の皇位継承に関する先例を論じて、大日本史の大友天皇紀に及ぶ（下）」『歴史地理』6-11、1904年、同「後淡海宮御宇天皇論」『史林』7-3・4、1922年。

治世の2年からはじまる。もし、この巻の初年に干支を記入しなければ、この巻を繙く者は他の巻を繙かなければ干支を知りがたい。ゆえにとくに天武2年の末尾に干支を記したのであり、1巻ずつ分かれていた卷子本にあっては、その必要があったのである。

以上の喜田の反論のうち、後者の③に対する反論は切れ味が鈍く、信友説への十分な反論とはなっていない。巻28の末尾に「太歳壬申」とあれば、巻29の初年の干支もすぐに判明する。むしろ天武元年条の末尾に太歳干支のない方が読者を惑わせるであろう。天智・持統ともその称制元年の末尾にそれぞれ「太歳壬戌」「太歳丁亥」と太歳干支が掲げられているのであるから、天武のみ称制元年である壬申年の末尾に「太歳壬申」と書かれていないのはやはり不審なのである。

それでは、前者の②に対する喜田の反論は有効であろうか。薬師寺東塔檼銘の「即位八年、庚辰之歳」はたしかに天武9年庚辰をさし、『日本書紀』の紀年と矛盾がないかのようなのである。しかし、「御宇九年」と書かずに「即位八年」という異例の表現を行っているのは、やはり壬申年の位置づけが定まる以前の様相を呈しているように思わせる。平子鐸嶺は壬申年には淡海朝廷が主権を有していたことを認めざるをえないとし、東塔檼銘はそうした認識が存在した頃に刻まれたものであると論じている¹⁵⁾が、傾聴すべき意見といえよう。

喜田は、天智や持統の称制初年と即位元年とを比較しながら、天武元年を壬申年に置くことの正統性を主張したが、こうした論法は視点を変えれば、大友の治世元年を認める論法に発展させることができる。①の『懷風藻』により、大友が太政大臣として万機を親裁し、そのあと皇太子に立ったことを認めると、以下のような議論を行うことが可能となろう。

天智10年(671)10月、天智は大海人皇子に後事を託そうとしたが、大海人は病と称してこれを固辞し、大後の即位と大友王の執政就任を請い、自らは吉野へ退去して仏道修行せんと述べた。12月乙丑(3日)に天智が崩じると、翌天武元年6月に壬申の乱が起こって、7月に大海人軍が近江京に攻め込み、大友皇子は山前で自縊した。勝利した大海人は9月に倭京に帰還して岡本宮に入り、その南に新宮を営んだのち、その冬に遷居した。そして翌天武2年2月、大海人は飛鳥浄御原宮において即位した。

以上、『日本書紀』の紀年によって、壬申の乱前後の状況を略述したが、天智が崩じた671年12月以降、翌672年7月までは近江朝廷が存在し、大友皇子が皇太子もしくは太政大臣として統治していたことは疑いない。たとえ大友が即位していなかったとしても、称制もしくは称制に準じて大友が執政者であったことは認められるべきである。

天智が皇太子として称制した初年を天智元年とし、持統が皇后として称制した初年を持統元年とするのと同様、大友の称制初年を大友元年とみなすのは何ら問題ないことであろう。672年壬申の7月までは明らかに大友の称制元年なのである。

672年の7月に大友が没したのち、大海人が称制して執政であったことは認められるとしても、

15) 平子鐸嶺「薬師寺東塔の檼の銘について」『増訂仏教芸術の研究』前掲、384-386頁。

天智・持統とも前帝没後、実質的に称制を開始しているにもかかわらず、その年は元年とせず、前帝崩御の翌年を称制の元年としている。その意味では、天武紀のみ天武が実質的に称制を開始した672年壬申から元年として数えはじめるのは、やはり異例であり、大友元年とすべき年を消し去って、自らの治世に組み込んでいるといわざるをえない。

喜田は天智没後に皇后倭姫王が即位したとみなし、672年壬申は倭姫王の治世に属したと主張する。喜田は6～7世紀には天皇崩後に即位予定であった皇子が若かった場合、皇后が即位した例がきわめて多かったことを、その理由とするが、大友の場合、すでに24歳に達しており、太政大臣として万機を總裁した経験があるのであるから、皇后の登極を求める必然性は乏しい。喜田の倭姫王即位説は根拠薄弱であり、大友皇子が名実ともに天智崩後の近江朝廷の執政者であったことに疑問の余地はないであろう。

『日本書紀』が天武元年ではなく、天武2年の末に「太歳癸酉」と書いているのは、やはり伴信友がいうように、本来は現在の天武2年癸酉が天武元年であったためと考えるべきであろう。672年壬申は大友元年であり、この年の末に「太歳壬申」と書くべきところを、この太歳干支を削って、壬申年の記事を天武元年に組み入れたが、本来の天武元年末にあった太歳干支を移動するのを忘れたために、現在のような異例の箇所に太歳干支が残されることになったものと考えられる。薬師寺東塔檨銘が「即位八年、庚辰之歳」という特異な表現を行っている背景にも、壬申年が天武元年と確定する以前の状況を読み取ることができるのである。

おわりに

明治3年に大友皇子とともに天皇号を追諡された人物に懷成親王がいる。順徳天皇の第4皇子の懷成は、承久3年（1221）4月20日に順徳天皇の譲位をうけて踐祚した。すなわち、大炊御門殿にいた順徳から閑院内裏にいた懷成に劍璽が譲り渡されたのである（『徳大寺相国記』、『御譲位部類記』所引「徳大寺相国記」、『百鍊抄』）。しかし、承久の乱で京方が敗れたため、懷成は在位70余日で廃された。即位礼・大嘗祭を行う前に退位したため、半帝・九条廢帝などと称されたが、明治3年に仲恭天皇の諡号を追贈されたのである。

この懷成親王の例は大友皇子の皇位継承に関して一つの示唆を与える。大友は天智の後継者たる太政大臣もしくは皇太子の地位にあったから、伴信友が指摘したように、天智崩後まもなく踐祚していた可能性が高い。すなわち皇位の象徴たる神器は大友の手に渡っていたと思われるのである。この時期の皇位継承方式のあり方が問題となるが、大友即位の問題を考える場合に、神器の相承という視点は避けて通れないであろう。今後はこうした観点から大友の即位問題を見直してみることも必要となつてこよう。

付、関西大学博物館所蔵金石文拓本調査目録抄

〔凡例〕

本目録抄は関西大学博物館所蔵の本山コレクションに含まれる木崎愛吉旧蔵金石文拓本資料のなかから、15 点を選び、その概要を摘記したものである。

資料名と【番号】は基本的に考古学等資料室「資料紹介『金石文拓本資料』」（『関西大学考古学等資料室紀要』3 号、1986 年）の「日本の部 金石文拓本目録」によった。

銘文の改行は拓本原本の記載に従った。よく知られた拓本の銘文については、その書出と書止のみを翻刻した。

【『大日本金石史』】は木崎『大日本金石史』に掲載されているものについて、その巻数と頁数を示し、【木崎添書】は拓本紙片に書き込まれた木崎の添書を示した。

拓本の調査と調査データの入力には、関西大学大学院生（当時）の笹田遥子・貫田瑛・前野智哉・関健太郎、同大学生（当時）の門政弘の諸氏の協力を得た。調査データの確認と補訂には西本があたった。

1 上野国多胡郡弁官符碑

【番号】A1-05

【端裏書】建多胡郡弁官符碑

【年紀】和銅 4 年（711）

【員数】1 枚

【拓本の法量】126*68.7

【銘文の性格】碑文

【銘文書出】弁官符上野國片岡郡縁野郡

【銘文書止】右大臣正二位藤原尊

【『大日本金石史』】1 巻、165 頁

【備考】右下に方形朱印「好尚所蔵金石」

2 多賀城碑

【番号】A1-09

【端裏書】多賀城碑

【年紀】天平宝字 6 年（762）12 月 1 日

【員数】1 幅（軸装）

【拓本の法量】154.2*86

【銘文の性格】碑文

【銘文書出】多賀城

【銘文書止】天平寶字六年十二月一日

【『大日本金石史』】1 巻、156 頁

【備考】右下端に方形朱印「好尚所蔵金石」

3 元明帝陵中誌石碑

【番号】A1-45

【年紀】寛政 7 年（1795）

【員数】1 枚

【拓本の法量】45.6*38.2

【銘文の性格】銘文（刷物）

【銘文】

右元明帝陵墓中誌石在吾郷之善城寺世稱為函石
蓋中古掘雍

良峰而得之後移于今處經歲久遠闕欠磨滅無存一
字好古之士

惜之予偶獲其古搨一本雖歛損頗多尚可讀因摹刻
藏于家以

備考古之典 寛政乙卯仲夏平城瀧世修識

元明帝陵内石誌不知何人書古健典雅佛足魚養諸
蹟

喪氣實可重稽々国史原文四十五字嚮一二所摹手
刻本

皆欠末行尾一葬字且原搨不佳刻手又粗真色幾亡
矣而

今所存石風霜剥盡塵々隱存格眼耳可惜哉余友

瀧子敬多年搜求頃獲古搨於其仰全文不損搨又極

精遂擇工刻之亦無毫髮遺根夫誌初因掘而以顯
而今磨泐則顯兮晦々所倚耶子豉能為此石全鼻目
於

子肖餘年之後者殆示有天意耶嗚呼神物顯晦有
時真不誣

濱世憲顯

【『大日本金石史』】1卷、107～108頁

【備考】右下に方形朱印「好尚所藏金石」

【木崎添書】「大正二年三月十七日、南都解古堂寄贈」

4 備後三調郡八幡神社 大般若經卷百三三石印

【番号】A1-71

【端裏書】備後三調郡八幡神社般若經写

【年紀】文化4年（1808）8月16日

宝亀10年（779）閏5月癸酉

【員数】1枚

【拓本の法量】24*72.5

【銘文の性格】銘文（刷物）

【銘文】

大般若波羅多經卷一百卅三
夫以般若大乘者斯及三世諸仏之行心
十地菩薩之寶藏照則帰依者誰不須災納
福隨順者豈无断戍證真伏惟為孝子坂
上忌寸氏成秋穗等慈光孝故出羽介從
五位下勲四等坂上忌寸石楯大夫之辱恩撫
育之慈高踰須弥助護之悲深過大海經
生累劫碎身捨命何得賴哉方欲西母
長壽晉於親東文還平感已盡曾參之
侍奉極仲申之孝養表為子之至誠展
事親之深禮豈謂四蛇役命二兕催□
報運既窮奄從去世孝誠有關慈類无
感衆路轉深終隔親見仰天伏地而雖悲
歎都無一益空沾額神唯有佛法必救
恩靈敬以維寶龜十年歲次己未潤
五月癸酉母紀朝臣多繼并男氏成女秋
穗等參人同志結言奉寫大般若大乘
壹部陸佰卷以為遠代之法寶也仰願以
此功德光同奉資光孝之神路般若之船
漂於苦海速到極樂之寶域大乘炬煥
於閻闍早登摩尼之玉殿永覺三界之夢

長息一如之床廣及有識共出迷濛到涅槃
岸

大般若波羅密多經第一百卅三

備後国三調郡八幡神宮寺所藏大般若經跋文一
紙本国三原青木新甫介伊澤愼父以示五日今欲
刻此以傳同好而其所謂氏成等四人未詳其傳願
為考訂馬余嘗於續日本紀中抄出人名以五十音
分類以便考閱而未成書近以奉託
華陽公々々々命侍史補吾闕漏其書適新成乃據
而檢之坂上忌寸石楯者天平寶字八年八月壬子
斬押勝傳首京師之人也而書石村々主石楯即翌
年四月丁亥賜姓坂上忌寸則為其人不可疑也他
三人者則無所考矣文化三年八月十六日源弘賢
書應需

【備考】右下に方形朱印「好尚所藏金石」

5 善源寺刑場址碑名号供養碑

【番号】A2-40

【年紀】慶安元年（1652）8月8日

【員数】1枚

【拓本の法量】136*68.3

【銘文の性格】碑文

【銘文】

慶安元年

南無阿弥陀仏 為諸惡人菩提也

八月八日

【『大日本金石史』】5卷、139～141頁

【備考】右下に長方形朱印「好尚手拓金石」

【木崎添書】「善源寺刑場址碑」

6 屋嶋寺文明十一年八月廿一日銘

【番号】A2-81

【端裏書】屋嶋寺^{不明}銘（文明十一年八月）

【史料名】屋嶋寺文明十一年八月二十一日銘

【年紀】文明11年（1479）8月27日

【員数】1枚

【拓本の法量】33*24.3

【銘文の性格】碑文

【銘文】

大三^{〔連カ〕}□
 文明十一年八月廿七日
 【備考】右下に方形朱印「好尚所藏金石」
 【木崎添書】「屋嶋寺」

7 小野毛人墓誌銘
 【番号】A3-02
 【年紀】天武天皇 6 年（677）
 【員数】1 幅（軸装）
 【拓本の法量】62.2*26.4
 【銘文の性格】銘文
 【銘文書出】飛鳥浄御原宮治天下天皇
 【銘文書止】十二月上旬即葬
 【『大日本金石史』】1 巻、55 ～ 59 頁

8 慶長六年基督教徒墓碑
 【番号】A4-10-1
 【年紀】慶長 6 年（1601）4 月 1 日
 【員数】1 枚
 【拓本の法量】44.1*33.6
 【銘文の性格】碑文
 【拓本銘文】
 慶長六年
 （二支十字） 佐保カララ （聖杯）
 四月一日

9 慶長八年基督教徒墓碑
 【番号】A4-10-2（BⅡ10-10.2）
 【年紀】慶長 8 年（1603）1 月 10 日
 【員数】1 枚
 【拓本の法量】66.8*48
 【銘文の性格】碑文
 【拓本銘文】
 慶長八年
 （二支十字） 上野マリヤ
 正月十日

10 文明十五年五輪塔 神戸湊町八幡
 【番号】A5-7
 【年紀】文明 15 年（1483）2 月

【員数】1 枚
 【拓本の法量】35.5*25.6
 【銘文の性格】碑文
 【拓本銘文】
 文明十五年
 （梵字） 結衆 敬白
 二月
 【備考】左下に方形朱印「好尚所藏金石」
 【木崎添書】「在兵庫湊町八幡祠五輪塔出土品」

11 延徳二年塔 大和生駒郡南田原長楽寺
 【番号】A5-9
 【年紀】延徳 2 年（1490）
 【員数】1 枚
 【拓本の法量】41.9*60.5
 【銘文の性格】碑文
 【拓本銘文】
 念仏論結衆
 梵字
 延徳二年^{庚四月}_{戊戌八月}
 【備考】左下に方形朱印「好尚所拓」
 【木崎添書】「大正三年十月十五日 大和生駒郡北
 倭村南田原長楽寺五輪塔」

12 大永七年塔 堺市八田荘家原原寺
 【番号】A5-13
 【年紀】大永七年（1527）
 【員数】2 枚
 【拓本の法量】① 31.0*31.3、② 29.8*29.2
 【銘文の性格】銘文
 【拓本銘文】
 大永七年
 法家衆生
 梵字（地）
 平等利益
 七月十三日
 【『大日本金石史』】4 巻、93 ～ 94 頁
 【備考】右下に方形朱印「好尚所藏金石」
 【木崎添書】「和泉國泉北郡八田荘字家原原寺五
 輪」「大正三年六月八日 □□自拓」

13 善通寺仏像銘

【番号】 A6-46

【年紀】 延慶三年（1310）

【員数】 1 枚

【拓本の法量】 13.8*7.5

【銘文の性格】 銘文

【拓本銘文】

延慶三年三月日

惣三郎大夫佐伯盛頼

【『大日本金石史』】 2 巻、233 頁

【備考】 右下に長方形朱印「好尚手拓金石」

14 出雲鰐淵寺菩薩立像銘

【番号】 A6-48

【員数】 1 枚

【拓本の法量】 9.8*28.9

【銘文の性格】 銘文

【拓本銘文】

壬辰年五月出雲國若倭部

臣徳太理為父母作奉菩薩

【備考】 左下に方形朱印「鰐淵寶藏」、右下に方形朱印「好尚所拓」「好尚所藏金石」

【木崎添書】「大正三年八月廿七日 出雲鰐淵寺国寶観音立像 高二尺六寸」

15 薬師寺東塔檨

【番号】 A6-70

【員数】 1 枚

【拓本の法量】 55.5*44.7

【銘文の性格】 銘文

【拓本銘文】 前掲本文参照

【『大日本金石史』】 1 巻、74 頁

【備考】 右下に方形朱印「好尚所藏金石」

【木崎添書】 大正二年八月十七日 薬師寺塔檨